

パターン発見は前のコンテンツで、データの重ね合わせの濃淡の分布を解析して得るものとなりました。この解析を高速で、曖昧性に対して頑健なものとする技術を提示したいと思います。

センサー値は空間的に分布するものと時系列なものがあります。いずれも、・・・特に高解像度のデータほど・・・分布が一致しているか、相違なのかは判定が難しいものです。実際のデータには外界の情報を担う働きがあり、外界は構造を持ち、オブジェクトという固まりをもって対峙しているものです。その外界のオブジェクトと情報の構造を得るのが電子頭脳としては重要なことなので、外乱となる細かなデータ値の変化は捨てるのが高速で、高品質の情報処理するのに有効です。

人間の情報処理について考えてみます。音声認識では、音素というものが先ず捉えられます。そうして音素の集まりである単語が構成され、単語のネットワークで音声の認識へと至ります。

色では、赤、緑、青の3原色があり、味では苦味とかうま味、甘味といった要素の感覚が基本にあります。画像認識でもそんな機構が働くと予想されます。

このように、先ず、音素のような多数の核データ素の獲得があり、その核データ素の集まりとして、重ね合わせの濃淡のデータ部分を単語のように捉え、単語の関係をネットワークを構成することになると考えられます。ネットワークは、時間の経過を表すものとか、原因結果（共起）関係を表すと考えて良いでしょう。

このように考えていきますと、データを重なり濃淡で捉えるということ、記号列と記号列のネットワークで捉えていこうという方向の技術があるということではないでしょうか。意志システムは記号を発生します。そうして言語システムを獲得していきます。この言語システム獲得のこの機構によって、パターン発見の土台が構築できるものかどうかではないでしょうか。